

鴨川の歴史を学ぼう

京都の伝統や文化を育んだ「鴨川河原」

わたしたちが、ふだん目にしている鴨川の姿は、昭和の改修工事によって形づくられたものです。それ以前の鴨川は、今とは全く異なった姿をしていました。

昔の鴨川は、川幅が今よりももっと広く、中州をぬうように水が流れていました。



平安時代の鴨川(平安京復元模型) 提供:京都市歴史資料館



葵祭(明治時代) 石井行昌氏撮影写真 京都府立総合資料館寄託

また、出町より上流では、その水はすべて地下にしみ込んでしまい、河原には水の流れがなかったようです。このことは、「葵祭」の様子を人々が河原からながめている明治時代の写真からもわかります。

平安京ができた初めのころ、鴨川の

河原やその周辺の土地は田畑や牛馬の放牧に利用されていました。その後、人口の増加やまちの拡大によって、鴨川の河原にもしだいに変化が現れました。

鴨川は、都の中にあって貴重な広い空間であったため、芝居小屋や見世物小屋、茶店などが建ち並び、多くの人々が河原に集まるようになりました。



江戸時代の四条河原の様子 出典:鴨川風雅集

このにぎわいから、善阿弥の庭園芸術や観阿弥・世阿弥親子の「能」、出雲阿国による「歌舞伎」などの多くの優れた文化が生まれました。

2 はん濫を繰り返していた鴨川

鴨川は、昔からたびたびはん濫を繰り返し、人々から暴れ川として恐れられていました。このため、鴨川のはん濫から京都のまちを守るため、昔の人々はさまざまな対策をとってきました。

鴨川の改修の歴史は古く、平安時代の天長元年(824年)には、鴨川の治水工事を担当する「防鴨河使」という役職がおかれ、水害の防止にあたっていました。

「防鴨河使」は、堤防をつくる工事などを進め、平安時代の終わりには、京都のまちを守る長い堤防ができていたといわれています。それでも鴨川はたびたびはん濫を繰り返し、時の権力者であった白河法皇でさえ手におえないもののうちのひとつとして、鴨川の水(鴨川の流とその水害)をあげ、嘆いたといわれています。

京都のまちを支えた高瀬川

高瀬川は、淀川をさかのぼってきた品物を、伏見の港から京都のまちに運ぶために開削された運河です。

慶長16年(1611年)に角倉了以によってつくられ、大正時代までの約300年間用いられました。

高瀬川には、鴨川の二条付近で取り入れた水が流れ、現在ではまちなかの貴重な水辺の空間になっています。

